

特定非営利活動法人 日本免疫学会  
平成 23 年度 Tadimitsu Kishimoto International Travel Award  
研究発表報告書

|               |  |      |         |
|---------------|--|------|---------|
| 申請者氏名         | 小野 寺 淳   | 会員番号 | 0030323 |
| 申請者の<br>所属・職名 | 千葉大学大学院医学研究院免疫発生学・G-COE特任助教  |      |         |
| 出席会議名         | NCI Symposium on Chromosome Biology: Chromosome Structure and Function                         |      |         |
| 発表論文<br>タイトル  | Genome-wide analysis reveals unique regulation of transcription of Th2-specific genes by GATA3 |      |         |

実施結果:

私は2011年10月30日から11月7日までの約一週間、アメリカ合衆国メリーランド州ベセスダに滞在し、NIH (National Institute of Health)において学会発表および共同研究の打ち合わせを行いました。

参加した学会はCenter of Excellence in Chromosome Biology Steering Committeeが主催するNCI Symposium on Chromosome Biologyです。世界中のクロマチンに関する研究者が集い、最新のテクノロジーを用いた研究成果が発表されていました。対象としている生物種や細胞種はそれぞれ異なっているのですが、皆クロマチンやエピジェネティクスに興味を持っており、横断的な学会の雰囲気を感じました。免疫学分野の研究者は少数派ではありましたが、私のポスター発表に興味を持ち質問してくれる他分野研究者もいて、非常に刺激を受けました。

初日である11月1日の招待演者による口頭発表で最も印象に残ったのは、一分子レベルでタンパク質とDNAの相互作用を可視化するテクノロジーです。動画を駆使したプレゼンテーションもすばらしく、多くの聴衆が感嘆していました。11月2日では、私が今最も興味を持っているChIP-Seq法の改良版ChIP-Exo法の発表、バイオインフォマティクス専門家による新規解析法の発表の二つが大変面白く感じました。前者はCell誌、後者はNature誌に掲載されている内容で、難解のためすべてを理解することはできなかったのですが、両者ともに主張していたtechnologyからbiologyへという合言葉に感銘を受けました。今回の学会参加により、多くの知識を学ぶことができたのと同時に、自分のモチベーションを高めることができました。

学会前日の10月31日には、共同研究者であるDr. John O'Sheaのラボで約二時間、私のプロジェクトについてディスカッションを行いました。O'Sheaラボは世界でもいち早くChIP-Seq法を取り入れた実績があり、バイオインフォマティクス専門家も在籍しています。私は、日本で取得済みのChIP-Seqデータを用いた研究に関してプレゼンテーションを行い、それに関して様々な意見や助言、質問を受けました。議論された事項は私の研究に直結するものばかりであり、大変有意義な時間を過ごすことができました。学会後の11月3日以降は、O'Sheaラボを中心として、Dr. Alfred Singerのラボ、Dr. William E. Paul のラボのポスドク研究者の方々とディスカッションを行ったり、ラボミーティングに参加したりしました。同世代の研究者と触れ合うことで、研究に対する姿勢や思考過程の重要性を再認識いたしました。

今回の海外渡航に際しまして、Tadimitsu Kishimoto International Travel Awardのご支援を頂きましてありがとうございました。岸本忠三先生をはじめ日本免疫学会の先生方、事務局の方々にこの場をお借りして心より感謝申し上げます。